

氏 名	キム ヒョン ソン 金 賢 善
学位(専攻分野)	博 士 (人間・環境学)
学 位 記 番 号	人 博 第 348 号
学位授与の日付	平 成 18 年 11 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	人 間 ・ 環 境 学 研 究 科 共 生 文 明 学 専 攻
学位論文題目	サッカー言説における日本の他者像と自己認識

論文調査委員	(主 査) 教 授 佐 伯 啓 思	教 授 高 橋 由 典	助教授 大 澤 真 幸
--------	----------------------	-------------	-------------

論 文 内 容 の 要 旨

本博士学位申請論文は、スポーツとりわけサッカーをめぐる報道メディアの言説の中で他者（他国民）がどのように表象されているのか、その他者像を媒介にしてどのような自己認識（自国民認識）が得られているのか、を考察した社会学的研究である。すなわち、この論文は、ナショナル・アイデンティティの形成過程を、スポーツに関する言説を素材にして探究することを目的としている。この場合、「自己」として照準されているのは、主として「日本」だが、章によっては、比較のために、韓国やイングランド等の他国の「自己認識」も論じられる。スポーツについての言説が中心的な素材とされているのは、広く知られているように、ナショナリズムに関連する大衆的な高揚が、スポーツの応援をめぐって顕著に現れるからである。中でもサッカーを重視するのは、サッカーは世界的に最も普及しているスポーツのひとつであり、グローバルな資本や労働の流れと結びつきながら、ナショナル・アイデンティティの明示的な表現媒体と化しているからである。本論文は、自己認識は、他者との差異の認識であるとの着眼の下で、「他者像」との対照で自己認識が得られる過程を分析している点に特徴がある。

本論文の第一章では、サッカーをめぐる考察に先立って、クリケットとベースボールに関する表象が分析される。全世界に広まったサッカーとは異なり、これらの種目は、一部地域のスポーツに留まった。その理由を解明することで、サッカーを論ずることの意義を浮き彫りにするのが本章である。ここでは、クリケットやベースボールは、「自分たちだけのゲーム」として囲い込まれることで、階級や国民のアイデンティティの形成にかかわったことが明らかにされる。クリケットには、「帝国性」や「階級的自尊心」が投射され、このスポーツが階級的境界を越えて広がることにイングランドの支配階級は警戒心をもった、と結論される。また、ベースボールには、イングランドからは区別されたアメリカ的民主主義の理念が託されたとされ、ここから「ベースボールの起源神話」の中でクリケットとベースボールとの類似性や連続性が否認された理由も説明される。さらに日本の「野球」にも、アメリカ的なもの（ベースボール）からは区別された日本性が投射されてきた、と申請者は論ずる。

これら囲い込まれたスポーツとは異なり、サッカーは、自己（自国民）と他者（他国民）の共通の地盤となる。そこでは、自己のイメージは、（同じサッカーに参加する）他者像を媒介にして、それとの差異において形成される。これが、この論文がサッカーに注目する理由である。

第二章では、サッカーにおける自己像／他者像の生産・消費の様相が、イングランドと日本のメディアをとりあげて考察される。イングランドのサッカー報道では、アルゼンチンとドイツが、しばしば、「重要な他者」として参照される。申請者によれば、イングランドにとって、アルゼンチン（マキャベリズム）は、「自分自身はそうなりたくない他者（排除の対象としての他者）」であり、ドイツ（組織への献身）は、「憧れながら、その水準に行けない他者（欠如の対象としての他者）」である。日本にとっての「重要な他者」は、韓国である。日韓のサッカーをめぐる日本のメディア（新聞・雑誌）の言説を分析しながら、申請者は、日本のメディアが、韓国に、「自分たちの過去」を投影し、「排除」（拒否）と「欠如」（憧

憬)の両義的な感情をさし向けている、と分析する。

第三章は、第二章を受けて、日本に関する考察を、2002年の日韓共催のワールドカップと2004年の(サッカーの)アジアカップをめぐる報道を素材にしながら、さらに詳細なものにしている。申請書の解釈によれば、ワールドカップについての日本の報道の中では、「韓国」は日本とは「正反対」であることがしばしば強調され、そのことで日本の自己像を再確認するのに利用された。また、アジアカップでは、過度にナショナリスティックな他者としての中国への対抗を通じて、日本のナショナル・アイデンティティが構築されていた、とされる。いわばナショナリズムに抗するナショナリズムとして、日本の自己像が立てられていた、と申請者は言うのである。

第四章では、再び、イングランドのサッカー・ナショナリズムが取り上げられる。しかし、参照される「他者」が、第二章とは異なっている。アルゼンチンやドイツは、イングランドのサッカーにとっては、常に規準として言及されてきた「伝統的な他者」であるが、アジア——具体的には韓国と日本——は、経済やコミュニケーションのグローバル化の結果遭遇することになった「新しい他者」である。グローバル化がもたらした、この新しい他者の像を分析するのが、第四章の目的である。申請者の分析によれば、韓国は、イングランドにとって、自分たちがはるか昔に失ったものを有する「遠い他者」であり、そこに献身や誠実性などのポジティブな価値が投影される。それに対して、日本は、アジアでもっともヨーロッパ的な「近い他者」であり、一方では「消費者」や「観客」として要請されながら、他方では、嘲弄の対象にもなっている、と論じられる。

第五章は、サッカーという文脈を離れ、スポーツ商品の消費との関連で、広く人種・民族的自己像／他者像がどのように形成されているのかを見ることを目的としている。ここでは、有名なスポーツ用品のメーカー(ナイキやアディダス)が製作したイメージ広告が主な分析対象となっている。ここで、申請者は、これらの広告が、多文化主義的な寛容を示すと同時に、人種や民族についてのステレオタイプを再生産していることを明らかにしている。

第六章は、第五章で引き出した「人種」という論点を、再びサッカーの文脈に投げ返す。すなわち、「新しい人種主義」が、サッカーに関する報道の中で、どのように現れているかを考察するのが、第六章の目的である。ここでは、現在のサッカーファンの中に、エティエンヌ・バリパールやアントニオ・ネグリが言う「人種なき人種主義」(文化的差異が本質化して事実上人種的な差異として機能すること)がときに見出される、ということが、いくつかの具体例によって示される。日本と北朝鮮との対立、(宗教的対立を背景にもつ)グラスゴー・セルティックとグラスゴー・レンジャースの間の対立等が、その例である。

以上のように、本論文は、スポーツ——とりわけサッカー——に関するメディアの報道を分析対象としながら、現代社会の中で、どのようにナショナルな自己像と他者像とが形成されるかを、きわめて具体的に分析している。

論文審査の結果の要旨

ナショナリズム研究の権威ベネディクト・アンダーソンは、ネーションは「想像された共同体」である、と論じた。本博士学位申請論文の試みを、アンダーソンのこの有名な論点との関連で位置づけることができる。すなわち、本論文は、ネーションが自己をどのように想像するのか、その想像された「自己」は「他者」についてのどのような想像に媒介されているのか、をスポーツに関する報道を素材にして、具体的に分析したものであると見なすことができる。

こうした研究史上の位置づけを前提にして、本論文の意義として、次の四点を挙げられよう。

第一に、自己と他者をめぐるネーションの想像を、スポーツとりわけサッカーに関する言説を素材にして詳細に描き出した点を高く評価することができる。アンダーソンやその議論を継承した研究者たちは、ネーションに関する想像をもたらした、さまざまな媒体を、研究してきた。その中で、最も多くの研究上の関心が差し向けられてきた対象は、「文学(小説や詩)」や「国語」である。ところで、われわれの多くは、スポーツの応援がナショナリスティックな感情を強く揺さぶるものであることを経験的によく知っている。オリンピックやワールドカップが興行として成功するのは、スポーツがナショナリズムと結びついているからである。そこで演じられるスポーツは、スポーツ以上のものである。「戦争」を別にすれば、スポーツは、一般の人々がナショナリズムを実感する最も顕著な場面であると言っても過言ではあるまい。こうした状況はよく知られているのに、スポーツやサッカーを素材にして「想像された共同体(としてのネーション)」を論ずるアカデミッ

クな仕事は、少なかった。厳密に言えば、グローバルゲームとしてのサッカーの歴史社会学的な意義について考察したりチャード・ギュリアノッティの著書や、スポーツとナショナル・アイデンティティの関連を論じた、ネイル・ブライン、レイモンド・ボイル、ヒュー・オドンネルの共著などを、先行の研究として挙げるができるが、それらにしても、ヨーロッパのメディアに視野が限られている。それに対して、本論文は、アジア（とりわけ日本や韓国）にまで視野を広げ、議論の一般化を図っている。このように、本論文は、研究史上の大きな欠落を埋めようとする試みである。

第二に、ネーションの自己認識が「他者像」の認知と相補的な関係にあるということを明示的に論じている点に、本論文のユニークな特徴がある。アンダーソンの場合には、主として、ネーションが自己を直接想像する仕方を考察しており、他者像との関連——とりわけ拒否や否定の対象となるような他者の像との関連——には、ほとんど配慮していない。それに対して、本論文は、自己像と他者像とは表裏一体の関係にあると考え、自己についての想像以上に、他者がどのように想像されたかに多くの分析を費やしている。他者をどう表象するかということに、自己がどのように想像されているのか——あるいは自己をどのように想像したいと欲しているのか——が現れるというのが、申請者の着眼である。この点に、本論文の独創性を認めることができる。

第三に、サッカーに関する現代の報道や、スポーツに関する広告の分析を通じて、現代的なナショナリズムや人種主義の特徴を描きだした点に、本論文の意義を認めることができるだろう。アンダーソンが「想像された共同体」とネーションを呼んだときに念頭にあったのは、主に、18世紀末期から20世紀中盤までの古典的なナショナリズムである。それに対して、本論文は、現在のスポーツ報道を分析対象としたため、結果的に、古典的なナショナリズムとは区別された、(20世紀の末期以降の)現代的なナショナリズムの特徴を明らかにすることとなった。たとえば、アンダーソンは、人の移動の範囲やコミュニケーションの伝達範囲が、特定の領域に限界づけられていたことの社会学的な帰結に注目した。それに対して、本論文では、サッカーをめぐる資本や労働の動きが国境線を越えてグローバル化しているという事実を踏まえ、グローバリゼーションとナショナリズムとが相互累進的に強化しあっている様に注目している。

第四に、メディアの内容分析や質的データの解釈に立脚した、社会学的な実証研究としても、本論文の意義を認めることができる。スポーツに関する報道の量は、夥しい。スポーツ報道の量や普及度は、政治や経済の報道、あるいは(芸術や文学などの)他の文化領域の報道を、はるかに上回っているだろう。この膨大なデータを——しかも日本一国に留まらず韓国やイングランドなどにまで視野を広げて——収集し、「難しい」とされている内容分析を試みていること、この点でも、この論文の学問的な価値を認めることができる。

以上に述べたように、本論文は、ナショナリズム研究としても、またスポーツ社会学の研究としても、先行研究に、新しく有意義な論点を付け加えたものとして、評価することができる。

よって本論文は博士(人間・環境学)の学位論文として価値あるものと認める。また、平成18年10月12日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。